

論文審査の結果の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（保健学）	氏名	浅野 早苗
学位授与の条件	学位規則第4条第1・2項該当		
論文題目 Effect of Education and Instruction on Chemotherapy-induced Taste Disorders in Outpatients with Breast Cancer: A Pilot Study (化学療法を受ける乳がん患者の治療関連味覚障害に対する看護師の教育的介入の効果)			
論文審査担当者			
主査	教授	宮下 美香	印
審査委員	教授	折山 早苗	
審査委員	教授	中谷 久恵	
〔論文審査の結果の要旨〕			
<p>がんに対する化学療法を受ける患者が共通して体験する有害事象に味覚変化がある。味覚は人にとって重要な感覚であり，味覚変化により患者の食事満足は低下し，身体的，心理社会的苦痛は深刻である。しかし，味覚変化に対する有効な予防法や治療法は確立されていない。近年，化学療法は外来で行われており，患者は味覚変化へのセルフケアを求められるが，現状では医療者から十分な支援が提供されていない。そこで本研究では，がんに対する化学療法を受ける患者の食事満足と味覚変化に対するセルフケアを支援する教育的介入を行い，その効果を明らかにすることを目的とした。</p> <p>研究デザインは多施設無作為化比較試験であり，効果の指標として食事満足，味覚変化を用いた。対象者は，2014年10月から2017年6月までに初めてStage I-IIIの乳がんと診断され，術前または術後にアンスラサイクリン系及びタキサン系レジメンを用いた補助化学療法を受ける20歳以上の女性で，Eastern Cooperative Oncology GroupのPerformance Statusが0または1，登録時に味覚変化の自覚がない，口腔内と嚥下機能，コミュニケーションに問題のない患者とし，介入群と対照群に無作為に割り付けた。介入群は通常の看護ケアに加えて教育的介入を受け，対照群は通院施設の通常の看護ケアを受けた。介入として，化学療法開始前に治療中に生じる味覚変化と対処方法などについて，研究者が作成したパンフレットを用いて情報を提供し，治療開始後に各レジメンの2コース目に面談を行い，実際に生じている味覚変化や関連する問題を確認し，症状に応じた食事の工夫や食べ方などを個別に提案した。介入の効果指標である治療中の食事満足と味覚変化をVisual Analogue Scale (VAS)を用い，0（変化なし）から100（最も悪い）で評価した。出現している味覚変化の症状と患者が取り入れたセルフケア項目について，面談時に調査した。データ収集は，治療開始前と各コースの15日目の9時点（先行レジメン4時点，レジメン変更時点，後続レジメン4時点），治療終了2カ月後の合計11時点で行った。分析は，治療開始前と治療中のVASスコア変化に対しFriedman's testを行い，事後検定はBonferroni testを用いた。各レジメン4コース目および治療終了2カ月後のベースラインからの変化量の群間比較としてMann-Whitney U-testを行った。</p> <p>結果，期間中に87例の対象者を登録し，11時点全てで回答が得られた53例（介入群28例，対照群25例）を分析対象とした。患者背景において群間に有意差を認めなかった。初回</p>			

の面談では、介入群における 16 名 (57%) の患者が味覚消失・減退を自覚していた。また、2 回目の面談においては、介入群のうち 20 名 (71%) の患者が味覚消失・減退を自覚していた。一方、味覚過敏・倒錯、異味症、悪味症、自発性異常味覚に関しては、初回面談では、介入群の 20 名 (71%) が自覚しており、2 回目は 19 名 (68%) が自覚していた。また、介入群の 23 名 (82%) が初回面談時に提案したセルフケアを実施していた。食事満足は、介入群、対照群ともに治療期間を通して有意な変化がみられた (それぞれ $p < 0.001$, $p < 0.001$)。各レジメン 4 コース目および全治療終了 2 か月後のベースラインからの変化量の平均値を群間比較した結果、対照群の方が有意に高かった ($p = 0.007 \sim 0.028$)。すなわち、介入群より対照群の方が食事満足の低下が大きかった。味覚変化についても介入群、対照群ともに治療期間中を通して有意な変化が示された (それぞれ $p = 0.001$, $p = 0.001$)。各レジメン 4 コース目および全治療終了 2 か月後のベースラインからの変化量の平均値を群間比較した結果、前半 4 サイクル後の食事満足の平均値に有意な差がみられた (介入群: 31.3 ± 35.0 , 対照群: 54.0 ± 31.8 , $p = 0.029$)。

教育的介入として情報提供と面談を実施し患者の症状体験を確認するとともに不足している情報を提供し、患者と一緒に実行可能な食事の工夫を考え、すでに取り組みされている対処方法を支持したことで患者のセルフケアの改善、継続につながり、食事満足や味覚の変化が抑えられたと推察される。

以上の結果から、本論文は乳がんに対する化学療法を受ける患者の治療中における食事満足と味覚変化に対し看護師が行う教育的介入の有効性を示唆するものであり、化学療法を受ける患者に対する看護実践の発展に貢献する研究として高く評価される。

よって審査委員会委員全員は、本論文が著者に博士 (保健学) の学位を授与するに十分な価値あるものと認めた。